

★2019年7月～9月の予定★

【事務所関係者の動き】

アンマン勤務(JICAヨルダン事務所内)

宮原 千絵 所長(ヨルダン事務所長兼務)
柳 竜也 次長(ヨルダン事務所次長兼務)
今村 誠 職員(ヨルダン事務所兼務)
成田 英幸 職員
河合 正吉 企画調査員
水野ショー 真希 企画調査員
高島 淳 企画調査員

【公休日】

8月11-14日 Eid Al Adha(犠牲祭)

「アハバール・カシオン」

～名前の由来について～

「アハバール」とはNewsを意味するアラビア語。「カシオン」とはダマスカスの北に位置する旧約聖書にも記されている山の名前です。

●お知らせ

アハバール・カシオンは[JICAホームページ](#)からのみご覧いただけます。
本ニュースレターは四半期に一度の発行です(原則4・7・10・1月を予定)。

●事務所から

2011年4月28日以降の関係者国外退避に伴い、JICAシリア事務所は現在JICAヨルダン事務所内に日本人所員執務所を設けています。

本号では、シリア国内における農業の状況についてのレポート、シリアの特産品であるダマスク・ローズについてのコラム等を掲載しています。

●レポート

シリア国内の農業について

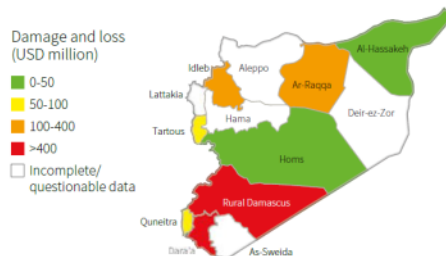
シリアの農業は、紛争前から基幹産業として位置づけられ、シリアの経済を支えてきた。その生産物は、国内消費だけでなく、輸出品として重要な役割を担っていた。しかし、2018年11月FAO/WFPの調査によると、小麦生産量は過去29年で最低の120万トンにまで落ち込んでいる。

紛争によるシリア国内の農業の被害状況をFAOの報告書でみると、多年生作物¹、一年生作物²ともに被害を受けているのがわかる。多年生作物はシリア南部で、一年生作物はシリア北部で被害が大きい。

ここで、特に主食となる小麦、大麦

の生産量とその耕地面積などに着目しその状況の変化を見る(次図3)。生産量、耕地面積ともに紛争前から大きく減少している。小麦の生産量は、2009年と比べると約1/3となっており、シリア国内の食糧事情に大きく影響を及ぼしていると思われるが、この状況には様々な要因があると考えられる。紛争を起因とし、耕作地を離れることや耕作を放棄することだけでなく、作物を小麦から、より短期の収入につながるような作物に変えること等が行われている。さらに2018年は、天候などの影響を受け、極端な生産量の

DAMAGE AND LOSS TO PERENNIAL CROPS



Source: Syria Damage and Loss Assessment, FAO 2017

図1：多年生作物¹の被害状況

LOSS OF ANNUAL CROPS

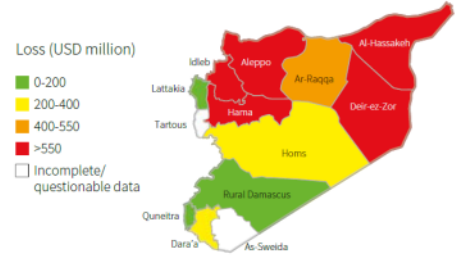


図2：一年生作物²の被害状況

出典：Counting the cost, FAO, 2017

¹アーモンド、リンゴ、アプリコット、チェリー、柑橘類、イチジク、ブドウ、ナッツ、オリーブ、桃、梨、ピスタチオ、プラム、ザクロ

²重要な食物である小麦や飼料となるトウモロコシ、大麦、現金収入につながる綿、タバコ、香辛料、てん菜

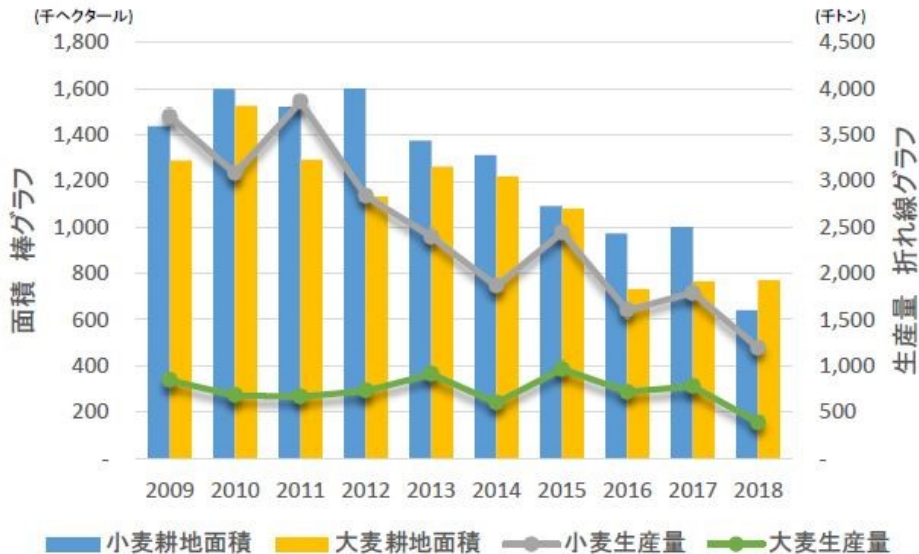


図3：小麦、大麦の生産地の面積と生産量の推移

出典：SPECIAL REPORT/ FAO/WFP CROP AND FOOD SECURITY ASSESSMENT MISSION TO THE SYRIAN ARAB REPUBLIC, 2018.10, WFP/FAOのデータを用い作成

減少が起きている。

図4は2018/19年の小麦・大麦の使用方法を示し、図5は同年の小麦・大麦の生産と輸入に関する状況を示している。シリア国内での小麦の生産量は、必要な小麦量の29%、ストックは12%で、合わせても41%にとどまってしまう。これに、政府輸入(24%)、商業輸入(5%)、食料支援(2%)を合わせてようやく71%に到達するが、食糧として必要な量に到達しない。シリアにおける主食の不足は、深刻な状況である。

今回、シリアにおける小麦・大麦の生産状況を取り上げ農業の一面を見たが、紛争の影響を受け、シリアの農業従事者は減少し、より簡単な農作物を生産する傾向がある。小麦の種についても、シリア国内で十分に生産ができなかったり、品質が下がったりしていることから、生産効率が悪くなる等の状況が発生している。以上から、JICAがシリア支援をできる状況になった場合、農業分野は重要な支援の一つと考えられる。

(河合 正吉 企画調査員)



図4：2018/19年小麦と大麦の使用方法

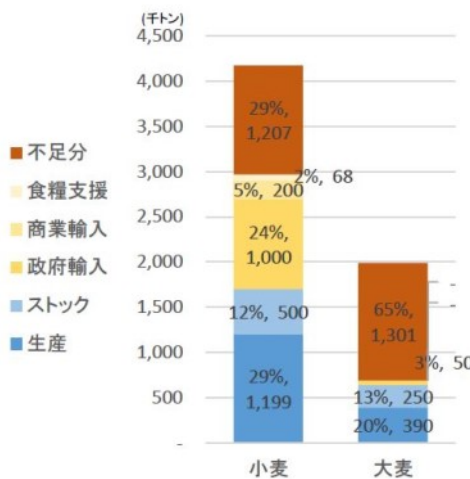


図5：2018/19年小麦と大麦の生産・輸入

出典：SPECIAL REPORT/ FAO/WFP CROP AND FOOD SECURITY ASSESSMENT MISSION TO THE SYRIAN ARAB REPUBLIC, WFP/FAO, 2018.10のデータを用い作成

◇アハバール・カシオンでは、読者のみなさまからの寄稿・写真投稿を随時募集しています。お気軽にお問い合わせください。

お問い合わせ先 (E-mail)
sr_oso_rep@jica.go.jp

◇バックナンバーは以下URLよりご覧いただけます。

<https://www.jica.go.jp/syria/office/others/newsletter.html>

●コラム

誇り高き花の女王…ダマスク・ローズ

金よりも貴重であり、「石油」よりも持続可能であり、収穫もまた美しい儀式となるもの。それが世界で最も有名なバラ、ダマスク・ローズ(別名ローザ・ダマスクナ)です。

ダマスク・ローズはシリアの首都ダマスカスにちなんで名付けられ、その豪華な色とすばらしい香りで評価の高いバラです。樹高は最大2.2メートルにまで成長し、花びらは薄いピンクから淡い赤色をしています。古代ギリシ

アの詩人サッフォーはダマスク・ローズを「花の女王」と呼び、それはこの花が取り上げられた最古の文献でもあります。また、シェークスピアの作品の中でも引用され、ソネット130番では “I have seen roses damask'd, red and white” と、恋人の頬の色を語る部分で登場します。

世界中で愛されるダマスク・ローズ ▶



ダマスク・ローズは古代ギリシア人・ローマ人・古代エジプト人によってシリアから古代世界に広がり、十字軍によりヨーロッパへと伝わったと言われています。

シリア国内では、カラムーン山地(Qalamoun Mountains)、シャイフ山(al-Sheikh Mountain)、およびダマスカス郊外グータの一部の地域に自生し、またアル・マラハ(al-Marah)近郊のアル・カスタル(al-Qastal)、ヤブルード(Yabroud)、エルネ(Erneh)、およびアレppoなどで栽培されています。シリア全土、特にダマスカスの真髓的な象徴であるにもかかわらず、その経済的可能性は国の中で未開発のままで残っていますが、官民双方によって経済的資源に変えようとする努力が続いています。

ダマスカス郊外のアル・マラハ村では、毎年約60~70トンのダマス



ク・ローズが生産されています。このバラを栽培することで、アル・マラハはシリア国内のみならず国際的にも有名になりました。

バラの刈り取り時期になると、農園では女性も男性も一緒にバラの花を収穫し、かごに集める美しく印象的な場面を見ることができます。集められたバラは、オイルやローズウォーターを抽出するために工場へと運ばれます。ローズオイルはこのダマスク・ローズから抽出されたもので、金よりも高価なものと考えられています。また、ダマスカスの人々の間ではローズシロップもとても人気があります。

その医薬的および化粧品用途とは別に、ダマスク・ローズは料理にも使われます。ローズウォーターは、アイスクリーム、ライスプディング、ヌガーなどのデザートで主に使用され、同じく地元の料理やお菓子の材料として人気のあるピスタチオとよく組み合わせられます。また、乾燥させた花は、地元では「ズフラート」として知られているミックスハーブティーに用いられます。

なにより特筆すべきなのは、ダマスク・ローズは雇用を生み出し、緑地を増やし、環境汚染と砂漠化を減らすのに非常に重要な役割を果たしていることです。この種の農業は大量の水や過酷な重労働は必要としないため、バラ栽培に対する需要は非



ダマスク・ローズは、ローズ・オイルやローズ・ウォーターの原料としても人気が高い(イメージ画像)

常に大きく、貧弱な土壌も含めて、様々な種類の土壌での栽培に成功しています。

このように、シリア国内ではダマスク・ローズと他の薬用および芳香性植物の栽培を奨励するため、関係機関が継続的に取り組んでいます。ダマスク・ローズは様々な産業で活用されており、多くの人々がこの作物の恩恵を受けていること、そしてシリアにおける貴重な輸出品であることを啓発するため、農業省は毎年ダマスク・ローズ・フェスティバルを開催しています。

ダマスク・ローズはシリアにとって、絶えることのない資源であり、世界中で人気を集める様から、まさに“ダマスカスの大使”と言えるでしょう。

(マラハ・モラッド シニア・プログラマー・オフィサー)

世界難民の日



ヨルダンからテレビ電話を通し、セミナー出席者の質問に答えるシリア事務

世界難民の日(6月20日)に合わせ、6月26日(水)にJICA市ヶ谷ビルにて、公開セミナー「難民に寄り添う: 知ることから始めよう—世界の難民状況と、UNHCRとJICAによる支援—」が開催されました。

セミナーではまず、UNHCR駐日事務所の守屋由紀広報官から、世界の難民発生状況について最新のデータを用いて解説および動画の上映があり、続いてJICA平和構築・復興支援室の中川享之副室長より、難民問題に対してJICAがどのようにアプローチを行い支援につなげるかの説明がありました。

難民支援の現場からは、UNHCRアレppo事務所の高島由美子所長が会場に駆けつけ、内戦による被害が大きかったシリア北部の都市アレppoにおける、帰還民に対するUNHCRの具体的な支援についての報告と動画上映があり、続いてJICAシリア事務所の柳次長がテレビ電話を通して、ヨルダン国内のシリア・パレスチナ難民およびホストコミュニティ(母国を逃れた人々を受け入れているヨルダン国内の地域社会)に対してJICAが実施している具体的な支援、また「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」(JISR: シリアの若者を留学生として日本へ受け入れる事業)等について解説しました。

セミナー後半の質疑応答時間には、難民の人々が移動をする上での経済状況、受け入れ先であるホストコミュニティの人々の反応等、出席者の方から多くの質問があり、難民問題に対する関心の高さがうかがえました。

● 着任挨拶

アハラン・ワ・サハラン！ようこそ！

次長
氏名：柳 竜也

はじめまして。今井健前次長の後任として2019年4月中旬に着任した柳竜也と申します。シリアには、約20年程前に一度だけ約1週間程旅行したことがあり、その際に歴史や文化、人々の暮らしの豊かさ等を大いに感じたという経験がありました。

シリアでは、混乱が9年目に突入してもなお、未だ完全な事態収束の道筋が見えず、そのような中で1千万人を超える方々が国内外に逃げることを余儀なくされているといった状況を思うと、大変心苦しく感じられます。この度シリア事務所次長を拝命し、シリアに関わらせていただく機会を得ましたので、事態の改善に微力ながら貢献出来ればと考えております。

皆様からのご指導、ご鞭撻を宜しくお願い致します。

● 離任挨拶

マアッサラーメ！お疲れ様でした！

次長
氏名：今井 健

着任時、シリアのために微力ながら貢献できるよう頑張りたいと言った趣旨のご挨拶をさせていただいてから3年が経過いたしました。この3年でシリア国内での支援再開には至りませんでした。シリア難民に対する人材育成事業「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム（JISRプログラム）」を開始することができました。同プログラムは将来のシリア復興に貢献出来るシリア人を対象としています。現在来日中のシリア人研修員が、シリアに戻り、復興に携わってくれる日が一日でも早く来ることを切に願っております。

シリア事務所在任中には大変お世話になり、ありがとうございました。後任の次長である柳竜也への変わらぬご支援、宜しくお願い致します。

青年海外協力隊員
氏名：前浦 武

「何か残すことができたのか。」今でもそれは分かりません。日々活動をし、帰国間近になればなるほど、その疑問は大きくなり、答えは見つからないままです。

私にとっては活動、同僚、子どもたち、全てがかけがえのない経験となり、これからの人生において役立つと確信しています。近い将来、教壇に立ち、私の経験を伝えることが、シリアの方々の為だけではなく、世界中の人々の為になると信じています。私が関わった子どもたちがこれから大人になり、私と関わることで得た、彼らそれぞれの何かが花咲く時を楽しみにしています。

皆様、お世話になりました。またいつか会える日を願っています。

ホームページ

www.jica.go.jp/syria/index.html

お問い合わせ先 (E-mail)

sr_oso_rep@jica.go.jp

お知らせ

アハパール・カシオンのバックナンバーは左記JICAホームページより閲覧いただけます。次号の発行は2019年10月の予定です。寄稿やお問い合わせはメールにて受け付けております。

編集後記

6月初旬にラマダン(断食月)が明け、いよいよ中東地域も夏本番となりました。今年は珍しく、ヨルダンとシリアでラマダン最終日が1日ずれました。月の観測や暦での計算など、いくつかの要素を総合して決めるそうです。ヨルダンの首都アンマンは標高1000m前後の高地であるため、直射日光下ではかなりの暑さではありますが、湿度がほぼなく夜になると気温が下がり涼しくなります。日本でも寒冷地出身の私には、東京と比べても過ごしやすくと感じます。シリアの首都ダマスカスも標高650m前後の高地に位置していますが、40℃を超える厳しい暑さとなる日もあるようです。シリア国内の電力不足は今もなお続いており、厳しい猛暑を冷蔵庫やクーラー・扇風機等無しで過ごしているため、食中毒や熱中症の増加が心配です。今後も読者のみなさまからの寄稿・写真投稿等を募集しております。(H.N.)